

H22 年度戦略国際 委託研究契約書 新旧対照表（案）

平成 2 1 年度版	平成 2 2 年度版	備考
<p>〇〇（以下「研究機関」という。）と独立行政法人科学技術振興機構（以下「機構」という。）は、機構の戦略的国際科学技術協力推進事業（研究交流型）における「所属機関名、所属部署名、氏名、役職名」を研究代表者とする研究課題「（研究課題名）」の実施に関し、次のとおり合意し、委託研究契約（以下「本契約」という。）を締結する。</p>	<p>〇〇（以下「研究機関」という。）と独立行政法人科学技術振興機構（以下「機構」という。）は、機構の戦略的国際科学技術協力推進事業（研究交流型）における「所属機関名、所属部署名、氏名、役職名」を研究代表者とする研究課題「（研究課題名）」の実施に関し、次のとおり合意し、委託研究契約（以下「本契約」という。）を締結する。</p>	

H 2 2 年度戦略国際 委託新旧対照表 (企業等用)

<p>(定義)</p> <p>第1条 本契約において、次の各号に掲げる用語の意義は、当該各号に定めるところによる。</p> <p>(1) 「本委託研究」とは、第2条に基づき研究機関に対して委託される研究をいう。</p> <p>(2) 「委託研究費」とは、直接経費と間接経費の合計をいう。</p> <p>(3) 「直接経費」とは、本委託研究に要する経費をいう。</p> <p>(4) 「間接経費」とは、本委託研究において必要となる事務管理費等として機構が研究機関に支払う経費をいう。</p> <p>(5) 「研究担当者」とは、本委託研究を中心的に行う者として第2条第1項第3号に掲げる者をいう。</p> <p>(6) 「研究員等」とは、研究機関に属し、研究担当者のもとで本委託研究に従事する者をいう。</p> <p>(7) 「研究者等」とは、研究担当者及び研究員等を個別に又は総称していう。</p> <p>(8) 「研究実施期間」とは、本委託研究を行う期間をいう。</p> <p>(9) 「研究成果」とは、本委託研究において得られた成果をいう。</p> <p>(10) 「知的財産権」とは、以下に掲げるものの総称をいう。</p> <p>ア 特許権、実用新案権、意匠権、回路配置利用権、育成者権及び外国における当該各権利に相当する権利</p> <p>イ 前アに定める各権利を受ける権利</p> <p>ウ 著作権 (著作権法 (昭和45年法律第48号) 第27条及び第28条に定める権利を含む。)、著作隣接権、報酬請求権 (著作権法第94条の2、第95条の3第3項及び第97条の3第3項に規定するもの)、二次使用料請求権 (著作権法第95条第1項及び第97条第1項に規定するもの) 及び外国における上記各権利に相当する権利 (以下「著作権」と総称する。)</p> <p>エ 秘匿することが可能な技術情報であつて、かつ、財産的価値のあるものの中から、研究機関及び機構協議の上、特に指定するもの (以下「ノウハウ」という。)</p> <p>オ 次に掲げるものに該当する、学術的・財産的価値その他の価値のある有体物 (以下「成果有体物」という。)</p> <p>(i) 研究開発の際に創作又は取得されたものであつて研究開発の目的を達成したことを示すもの</p> <p>(ii) 研究開発の際に創作又は取得されたものであつて(i)を得るために利用されるもの、又は(i)を創作又は取得するに際して派生して創作又は取得されたもの</p> <p>(11) 「発明等」とは、特許権の対象となるものについてはその発明、実用新案権の対象となるものについてはその考案、意匠権、回路配置利用権、著作権の対象となるもの、及び成果有体物についてはその創作、育成者権の対象となるものについてはその育成並びにノウハウの対象となるものについてはその案出をいう。</p> <p>(12) 「実施」とは、特許法 (昭和34年法律第121号) 第2条第3項に定める行為、実用新案法 (昭和34年法律第123号) 第2条第3項に定める行為、意匠法 (昭和34年法律第125号) 第2条第3項に定める行為、半導体集積回路の回路配置に関する法律 (昭和60年法律第43号) 第2条第3項に定める行為、種苗法 (平成10年法律第83号) 第2条第5項に定める行為、著作権法第21条から第28条に定める権利に基づく利用行為並びにノウハウ、及び成果有体物を使用する行為をいう。</p>	<p>(定義)</p> <p>第1条 本契約において、次の各号に掲げる用語の意義は、当該各号に定めるところによる。</p> <p>(1) 「本委託研究」とは、第2条に基づき研究機関に対して委託される研究をいう。</p> <p>(2) 「委託研究費」とは、直接経費と間接経費の合計をいう。</p> <p>(3) 「直接経費」とは、本委託研究に要する経費をいう。</p> <p>(4) 「間接経費」とは、本委託研究において必要となる事務管理費等として機構が研究機関に支払う経費をいう。</p> <p>(5) 「研究担当者」とは、本委託研究を中心的に行う者として第2条第1項第3号に掲げる者をいう。</p> <p>(6) 「研究員等」とは、研究機関に属し、研究担当者のもとで本委託研究に従事する者をいう。</p> <p>(7) 「研究者等」とは、研究担当者及び研究員等を個別に又は総称していう。</p> <p>(8) 「研究実施期間」とは、本委託研究を行う期間をいう。</p> <p>(9) 「研究成果」とは、本委託研究において得られた成果をいう。</p> <p>(10) 「知的財産権」とは、以下に掲げるものの総称をいう。</p> <p>ア 特許権、実用新案権、意匠権、回路配置利用権、育成者権及び外国における当該各権利に相当する権利</p> <p>イ 前アに定める各権利を受ける権利</p> <p>ウ 著作権 (著作権法 (昭和45年法律第48号) 第27条及び第28条に定める権利を含む。)、著作隣接権、報酬請求権 (著作権法第94条の2、第95条の3第3項及び第97条の3第3項に規定するもの)、二次使用料請求権 (著作権法第95条第1項及び第97条第1項に規定するもの) 及び外国における上記各権利に相当する権利 (以下「著作権」と総称する。)</p> <p>エ 秘匿することが可能な技術情報であつて、かつ、財産的価値のあるものの中から、研究機関及び機構協議の上、特に指定するもの (以下「ノウハウ」という。)</p> <p>オ 次に掲げるものに該当する、学術的・財産的価値その他の価値のある有体物 (以下「成果有体物」という。)</p> <p>(i) 研究開発の際に創作又は取得されたものであつて研究開発の目的を達成したことを示すもの</p> <p>(ii) 研究開発の際に創作又は取得されたものであつて(i)を得るために利用されるもの、又は(i)を創作又は取得するに際して派生して創作又は取得されたもの</p> <p>(11) 「発明等」とは、特許権の対象となるものについてはその発明、実用新案権の対象となるものについてはその考案、意匠権、回路配置利用権、著作権の対象となるもの、及び成果有体物についてはその創作、育成者権の対象となるものについてはその育成並びにノウハウの対象となるものについてはその案出をいう。</p> <p>(12) 「実施」とは、特許法 (昭和34年法律第121号) 第2条第3項に定める行為、実用新案法 (昭和34年法律第123号) 第2条第3項に定める行為、意匠法 (昭和34年法律第125号) 第2条第3項に定める行為、半導体集積回路の回路配置に関する法律 (昭和60年法律第43号) 第2条第3項に定める行為、種苗法 (平成10年法律第83号) 第2条第5項に定める行為、著作権法第21条から第28条に定める権利に基づく利用行為並びにノウハウ、及び成果有体物を使用する行為をいう。</p> <p>(13) 「専用実施権等」とは、特許権、実用新案権若しくは意匠権についての専用実施権又は回路配置利用権若しくは育成者権についての専用利用権をいう。</p>	<p>第1条(13)追記</p> <p>・本契約第10条に対応する追記</p>
---	--	---

H22年度戦略国際 委託新旧対照表（企業等用）

<p>(研究の委託)</p> <p>第2条 機構は次の研究を研究機関に委託し、研究機関はこれを受託する。</p> <p>(1) 研究題目：</p> <p>(2) 研究目的及び内容：</p> <p>(3) 研究担当者： 所属・職名・氏名</p> <p>(4) 研究実施期間：平成〇〇年〇〇月〇〇日から平成〇〇年〇〇月〇〇日まで</p> <p>(5) 委託研究費： 別表のとおり</p>	<p>(研究の委託)</p> <p>第2条 機構は次の研究を研究機関に委託し、研究機関はこれを受託する。</p> <p>(1) 研究題目：</p> <p>(2) 研究目的及び内容：</p> <p>(3) 研究担当者： 所属・職名・氏名</p> <p>(4) 研究実施期間：平成〇〇年〇〇月〇〇日から平成〇〇年〇〇月〇〇日まで</p> <p>(5) 委託研究費： 別表のとおり</p>	
<p>(概算払い)</p> <p>第3条 研究機関は機構の指示に従い、委託研究費の概算払いのための請求書を作成し、機構にこれを送付する。ただし、請求書に記載される金額の総額は直接経費及び間接経費の合計額とし、間接経費は、機構が研究機関に概算払いとして支払う直接経費の10%に相当する額を超えないものとする。</p> <p>2 支払期限は、研究機関が当該請求書に設定した支払期限にかかわらず、当該請求書が機構に到達した日の翌月末日とする。</p> <p>3 機構は、当該請求書に従い、委託研究費の概算払いを行う。研究機関は、機構から概算払いされた委託研究費を本委託研究遂行のために使用するものとする。</p> <p>4 研究機関は、別表で定める直接経費の金額の内訳を変更しようとするときには、別に定める流用申請書を機構に提出し、その承認を受けなければならない。ただし、費目間の流用でその流用額が各費目のいずれか低い金額の30%未満の場合若しくは50万円を超えない場合、又は設備備品費への流用増を除く細目間の流用を行う場合はこの限りではない。</p> <p>5 研究機関からの申請に基づき、直接経費の流用が行われる場合には、機構から研究機関及び研究担当者に機構が承認した当該流用の内容を通知する。</p>	<p>(概算払い)</p> <p>第3条 研究機関は機構の指示に従い、委託研究費の概算払いのための請求書を作成し、機構にこれを送付する。ただし、請求書に記載される金額の総額は直接経費及び間接経費の合計額とし、間接経費は、機構が研究機関に概算払いとして支払う直接経費の10%に相当する額を超えないものとする。</p> <p>2 支払期限は、研究機関が当該請求書に設定した支払期限にかかわらず、当該請求書が機構に到達した日の翌月末日とする。</p> <p>3 機構は、当該請求書に従い、委託研究費の概算払いを行う。研究機関は、機構から概算払いされた委託研究費を本委託研究遂行のために使用するものとする。</p> <p>4 研究機関は、別表で定める直接経費の金額の内訳を変更しようとするときには、別に定める流用申請書を機構に提出し、その承認を受けなければならない。ただし、費目間の流用でその流用額が直接経費の総額の50%（この額が200万円に満たない場合は200万円）を超えない場合、又は設備備品費への流用増を除く細目間の流用を行う場合はこの限りではない。</p> <p>5 研究機関からの申請に基づき、直接経費の流用が行われる場合には、機構から研究機関及び研究担当者に機構が承認した当該流用の内容を通知する。</p>	<p>流用制限の緩和</p>
<p>(追加概算払い)</p> <p>第4条 機構は、本委託研究の実施にあたり、委託研究費の追加が必要と機構が判断したものについて、追加額及び追加が必要と判断された理由を付した変更契約書等を研究機関と機構が別途締結した場合、委託研究費の追加の概算払いを行うことができるものとする。</p> <p>2 前項に基づき、委託研究費の追加の概算払いが行われる場合には、研究機関は機構の指示に従い、委託研究費の概算払いのための請求書を作成し、機構にこれを送付する。機構は、当該請求書に従い、委託研究費の追加の概算払いを行うものとする。</p> <p>3 本条第1項に基づき委託研究費の追加の概算払いが行われる場合、機構は当該追加された直接経費に第3条第1項に規定される割合を乗じた額の間接経費を加えた額の概算払いを行うものとする。</p>	<p>(追加概算払い)</p> <p>第4条 機構は、本委託研究の実施にあたり、委託研究費の追加が必要と機構が判断したものについて、追加額及び追加が必要と判断された理由を付した変更契約書等を研究機関と機構が別途締結した場合、委託研究費の追加の概算払いを行うことができるものとする。</p> <p>2 前項に基づき、委託研究費の追加の概算払いが行われる場合には、研究機関は機構の指示に従い、委託研究費の概算払いのための請求書を作成し、機構にこれを送付する。機構は、当該請求書に従い、委託研究費の追加の概算払いを行うものとする。</p> <p>3 本条第1項に基づき委託研究費の追加の概算払いが行われる場合、機構は当該追加された直接経費に第3条第1項に規定される割合を乗じた額の間接経費を加えた額の概算払いを行うものとする。</p>	
<p>(帳簿等の整理)</p> <p>第5条 研究機関は、本委託研究に要した直接経費を明らかにするため、本委託研究に関する独立した帳簿を常に整備し、支出の証拠書類と共に、本契約終了後5年間保管するものとする。</p> <p>2 研究機関は、機構から帳簿及び証拠書類の閲覧の申し出があった場合、これに応じなければならない。</p>	<p>(帳簿等の整理)</p> <p>第5条 研究機関は、本委託研究に要した直接経費を明らかにするため、本委託研究に関する独立した帳簿を常に整備し、支出の証拠書類と共に、本契約終了後5年間保管するものとする。</p> <p>2 研究機関は、機構から帳簿及び証拠書類の閲覧の申し出があった場合、これに応じなければならない。</p>	

H22年度戦略国際 委託新旧対照表（企業等用）

<p>(取得物品の帰属等)</p> <p>第6条 本委託研究のために研究機関が直接経費により取得した物品等（以下「取得物品」という。）の所有権は、機構に帰属するものとし、研究機関は、機構に帰属した取得物品を研究実施期間終了までの間、無償で使用するものとする。</p> <p>2 研究機関は、取得物品を善良な管理者の注意をもって管理するものとする。</p> <p>3 研究機関は、機構の職員又は機構の指定する者による研究機関の施設に対する立ち入り又は取得物品の検査の申し出があった場合、これに応じるものとする。</p> <p>4 研究機関は研究実施期間終了後遅滞なく、機構の指示に従い取得物品を機構に引き渡すものとする。</p>	<p>(取得物品の帰属等)</p> <p>第6条 本委託研究のために研究機関が直接経費により取得した物品等（以下「取得物品」という。）の所有権は、機構に帰属するものとし、研究機関は、機構に帰属した取得物品を研究実施期間終了までの間、無償で使用するものとする。</p> <p>2 研究機関は、取得物品を善良な管理者の注意をもって管理するものとする。</p> <p>3 研究機関は、機構の職員又は機構の指定する者による研究機関の施設に対する立ち入り又は取得物品の検査の申し出があった場合、これに応じるものとする。</p> <p>4 研究機関は研究実施期間終了後遅滞なく、機構の指示に従い取得物品を機構に引き渡すものとする。</p>	
<p>(提供物品の使用等)</p> <p>第7条 機構は、本委託研究の遂行上必要と認められる場合には、機構及び研究機関が協議の上、機構が所有し研究機関に提供される物品等(以下「提供物品」という。)を研究機関が使用することを認めることができる。この場合における提供物品の維持管理に必要な経費及び公租公課等、提供物品の調達、搬入及び据え付けに要する経費は、機構の負担とする。</p> <p>2 研究機関は、前項に基づき提供物品を、善良なる管理者の注意をもって管理するものとする。</p> <p>3 研究機関は、機構の職員又は機構の指定する者による研究機関の施設に対する立ち入り又は提供物品の検査の申し出があった場合、これに応じるものとする。</p> <p>4 研究機関は、研究実施期間終了後遅滞なく、機構の指示に従い提供物品を機構に引き渡すものとする。</p>	<p>(提供物品の使用等)</p> <p>第7条 機構は、本委託研究の遂行上必要と認められる場合には、機構及び研究機関が協議の上、機構が所有し研究機関に提供される物品等(以下「提供物品」という。)を研究機関が使用することを認めることができる。この場合における提供物品の維持管理に必要な経費及び公租公課等、提供物品の調達、搬入及び据え付けに要する経費は、機構の負担とする。</p> <p>2 研究機関は、前項に基づき提供物品を、善良なる管理者の注意をもって管理するものとする。</p> <p>3 研究機関は、機構の職員又は機構の指定する者による研究機関の施設に対する立ち入り又は提供物品の検査の申し出があった場合、これに応じるものとする。</p> <p>4 研究機関は、研究実施期間終了後遅滞なく、機構の指示に従い提供物品を機構に引き渡すものとする。</p>	
<p>(知的財産権の帰属)</p> <p>第8条 機構は、研究機関が産業技術力強化法（平成12年法律第44号）第19条第1項各号に掲げる全ての事項（同条項中、「特定研究開発等成果」については「発明等」、「国」については「機構」（ただし、同項第2号の「国」については「国又は機構」）とそれぞれ読み替えるものとする。）及び／又は、コンテンツの創造、保護及び活用の促進に関する法律（平成16年法律第81号）第25条第1項各号に掲げる全ての事項（同条項中、「国」については「機構」（ただし、同項第2号の「国」については「国又は機構」）、「法人」及び「受託者等」については「研究機関」、と読み替えるものとする。）（以下「遵守事項」と総称する。）を遵守することを条件に、研究担当者及び／又は研究機関に所属する研究員等（以下、本条において「研究機関発明者」という。）が本委託研究の過程で発明等を行ったことにより生じた知的財産権（全部又は一部の持分であることを問わない。以下同じ。）を研究機関から譲り受けないものとする。ただし、研究機関が当該知的財産権を放棄した場合は、この限りでない。</p> <p>2 機構は、研究機関が遵守事項を遵守しない場合、前項に定める知的財産権を無償で譲り受けることができるものとし、研究機関は、これらの知的財産権を譲渡しなければならぬものとする。</p>	<p>(知的財産権の帰属)</p> <p>第8条 機構は、研究機関が産業技術力強化法（平成12年法律第44号）第19条第1項各号に掲げる全ての事項（同条項中、「特定研究開発等成果」については「発明等」、「国」については「機構」（ただし、同項第2号の「国」については「国又は機構」）とそれぞれ読み替えるものとする。）及び／又は、コンテンツの創造、保護及び活用の促進に関する法律（平成16年法律第81号）第25条第1項各号に掲げる全ての事項（同条項中、「国」については「機構」（ただし、同項第2号の「国」については「国又は機構」）、「法人」及び「受託者等」については「研究機関」、と読み替えるものとする。）（以下「遵守事項」と総称する。）を遵守することを条件に、研究担当者及び／又は研究機関に所属する研究員等（以下、本条において「研究機関発明者」という。）が本委託研究の過程で発明等を行ったことにより生じた知的財産権（全部又は一部の持分であることを問わない。以下同じ。）を研究機関から譲り受けないものとする。ただし、研究機関が当該知的財産権を放棄した場合は、この限りでない。</p> <p>2 機構は、研究機関が遵守事項を遵守しない場合、前項に定める知的財産権を無償で譲り受けることができるものとし、研究機関は、これらの知的財産権を譲渡しなければならぬものとする。</p>	

H22年度戦略国際 委託新旧対照表（企業等用）

<p>(知的財産権の譲渡その他)</p> <p>第9条 機構は、前条第1項ただし書きに基づき機構に帰属することとなった知的財産権について、出願後に、研究機関から当該知的財産権の譲渡の申入れがあった場合、当該知的財産権の出願・維持等に機構がそれまでに支出した費用の支払を受けること、当該知的財産権の発明者の同意が得られること及び研究機関が遵守事項を遵守することを条件に当該知的財産権に対して機構が有する持分を研究機関に譲渡することができる。</p> <p>2 前項の規定にかかわらず、機構は、研究機関から当該知的財産権の譲渡に係る申入れを受けた時点で既に第三者に実施許諾等を行っている場合には、当該知的財産権を譲渡しないことができる。</p> <p>3 研究機関は、研究機関に帰属することとなった知的財産権につき、第三者に譲渡又は実施許諾する場合、遵守事項及び第10条各号の規定の適用に支障を来さないよう当該第三者と約定するものとする。</p>	<p>(知的財産権の譲渡その他)</p> <p>第9条 機構は、前条第1項ただし書きに基づき機構に帰属することとなった知的財産権について、出願後に、研究機関から当該知的財産権の譲渡の申入れがあった場合、当該知的財産権の出願・維持等に機構がそれまでに支出した費用の支払を受けること、当該知的財産権の発明者の同意が得られること及び研究機関が遵守事項を遵守することを条件に当該知的財産権に対して機構が有する持分を研究機関に譲渡することができる。</p> <p>2 前項の規定にかかわらず、機構は、研究機関から当該知的財産権の譲渡に係る申入れを受けた時点で既に第三者に実施許諾又は譲渡を行っている場合には、当該知的財産権を譲渡しないことができる。</p>	<p>第9条2項修正</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象範囲の明示 <p>第9条3項削除</p> <ul style="list-style-type: none"> ・産業技術力強化法第19条改正に伴い、本契約第10条への移行
---	---	---

H 2 2 年度戦略国際 委託新旧対照表 (企業等用)

<p>(知的財産権に関する報告・通知)</p> <p>第10条 研究機関は、第8条又は第9条の規定に基づき研究機関に帰属することとなった知的財産権に関して、機構が当該知的財産権の共有持分権を有していない場合には、次の各号の規定を遵守する。</p> <p>(1) 出願、申請又は譲渡を行うときは、事前に機構が別途定める様式による知的財産権出願・譲渡通知書により機構に対し通知するものとする。</p> <p>(2) 出願、申請又は譲渡を行ったときは、出願、申請又は譲渡の日から60日以内に機構が別途定める様式による知的財産権出願・譲渡通知書により機構に対し通知するものとする。</p> <p>(3) 研究機関は、前号の出願又は申請を行った知的財産権に関して、設定登録等、その後の状況に変化があった場合、設定登録を受けた日等から60日以内に、機構が別途定める様式による知的財産権設定登録等通知書により、機構に通知するものとする。</p> <p>(4) 研究機関は、第1号の出願又は申請を行った知的財産権について第三者に実施の許諾をしたときは、当該許諾をした日から60日以内に機構が別途定める様式による知的財産権実施許諾通知書により、機構に通知するものとする。</p> <p>(5) 研究機関は、各年度の知的財産権の実施状況について、機構が別途定める様式による知的財産権実施状況通知書により、次期事業年度4月末日までに機構に通知するものとする。研究機関は、当該知的財産権の実施が続く限り、機構に当該通知を行わなければならない。</p>	<p>(知的財産権に関する報告・通知)</p> <p>第10条 研究機関は、第8条又は第9条の規定に基づき研究機関に帰属することとなった知的財産権に関して、機構が当該知的財産権の共有持分権を有していない場合には、次の各号の規定を遵守する。</p> <p>(1) 出願又は申請を行うときは、事前に機構に対し通知するものとする。</p> <p>(2) 出願又は申請を行ったときは、出願又は申請の日から60日以内に機構が別途定める様式による知的財産権出願通知書により機構に対し通知するものとする。</p> <p>(3) 研究機関は、前号の出願又は申請を行った知的財産権に関して、設定登録等、その後の状況に変化があった場合、設定登録を受けた日等から60日以内に、機構が別途定める様式による知的財産権設定登録等通知書により、機構に通知するものとする。</p> <p>(4) 研究機関は、第1号の出願又は申請を行った知的財産権について第三者に実施の許諾(ただし、第5号に定める専用実施権等の設定若しくは移転を除く)をしたときは、当該許諾をした日から60日以内に機構が別途定める様式による知的財産権実施許諾通知書により、機構に通知するものとする。</p> <p>(5) 研究機関は、第三者に対し、知的財産権を移転しようとするときは、機構が別途定める様式による知的財産権移転承認申請書を提出し、予め機構の承諾を得るものとする。また、研究機関は、専用実施権等を設定若しくはその移転の承諾をしようとするときは、機構が別途定める様式による専用実施権等設定・移転承認申請書を提出し、予め機構の承諾を得るものとする。研究機関は、機構の承諾を得て知的財産権の移転又は専用実施権等の設定若しくは移転(以下「知的財産権の移転等」という)を行う場合、当該第三者をして遵守事項を遵守させるものとする。ただし、合併若しくは分割により移転する場合又は産業技術強化法施行令(平成12年政令第206号)第11条第3項各号に定める場合には、研究機関は、知的財産権の移転等をした日から60日以内に機構が別途定める様式による知的財産権設定登録等通知書又は知的財産権実施許諾通知書により、機構に対しそれぞれ通知すれば足りるものとする。</p> <p>(6) 研究機関は、各年度の知的財産権の実施状況について、機構が別途定める様式による知的財産権実施状況通知書により、次期事業年度4月末日までに機構に通知するものとする。研究機関は、当該知的財産権の実施が続く限り、機構に当該通知を行わなければならない。</p>	<p>譲渡の事前申請について第5号を追加</p>
<p>(知的財産権に関わるその他)</p> <p>第11条 研究機関及び機構は、本契約に別段の定めがない限り、それぞれ自己に帰属する知的財産権の出願・維持等に係る一切の費用を当該知的財産権に対するその持分に応じて負担する義務を負うものとする。</p> <p>2 機構及び研究機関が知的財産権の共有持分権者となる場合、当該知的財産権の出願に先立ち、機構所定の共同出願契約書を基礎に両者協議の上、これを締結しなければならない。</p> <p>3 研究機関は、知的財産権が自らに帰属する場合には、本委託研究の成果に関し、機構に納入された著作物にかかわる著作権について、機構による当該著作物の利用に必要な範囲内において、機構が使用する権利及び機構が第三者に使用を再許諾する権利を、機構に許諾したものとする。</p> <p>4 研究機関は、知的財産権が自らに帰属する際には、機構及び機構が指定する第三者による本委託研究の成果及びこれに関連する著作物にかかわる著作権の実施について、著作者人格権及び実演家人格権の不行使等の権利処理を研究機関自身の責任において行うものとする。</p>	<p>(知的財産権に関わるその他)</p> <p>第11条 研究機関及び機構は、本契約に別段の定めがない限り、それぞれ自己に帰属する知的財産権の出願・維持等に係る一切の費用を当該知的財産権に対するその持分に応じて負担する義務を負うものとする。</p> <p>2 機構及び研究機関が知的財産権の共有持分権者となる場合、当該知的財産権の出願に先立ち、機構所定の共同出願契約書を基礎に両者協議の上、これを締結しなければならない。</p> <p>3 研究機関は、知的財産権が自らに帰属する場合には、本委託研究の成果に関し、機構に納入された著作物にかかわる著作権について、機構による当該著作物の利用に必要な範囲内において、機構が使用する権利及び機構が第三者に使用を再許諾する権利を、機構に許諾したものとする。</p> <p>4 研究機関は、知的財産権が自らに帰属する際には、機構及び機構が指定する第三者による本委託研究の成果及びこれに関連する著作物にかかわる著作権の実施について、著作者人格権及び実演家人格権の不行使等の権利処理を研究機関自身の責任において行うものとする。</p>	

H2 2 年度戦略国際 委託新旧対照表（企業等用）

<p>(補償)</p> <p>第12 条 本委託研究による研究者等の負傷、疾病、障害又は死亡に対する補償は、当該研究者等が所属する研究機関が行うものとする。</p> <p>2 本委託研究の過程で生じた施設・設備等の損傷又は損耗の修補責任は、当該施設・設備等を管理する研究機関が負うものとする。</p>	<p>(補償)</p> <p>第12 条 本委託研究による研究者等の負傷、疾病、障害又は死亡に対する補償は、当該研究者等が所属する研究機関が行うものとする。</p> <p>2 本委託研究の過程で生じた施設・設備等の損傷又は損耗の修補責任は、当該施設・設備等を管理する研究機関が負うものとする。</p>	
<p>(再委託)</p> <p>第 13 条 研究機関は、本委託研究を第三者に再委託してはならない。ただし、研究機関は、機構が本委託研究の遂行上特に必要であると判断し事前に承認した場合に限り、本委託研究の一部を第三者に再委託することができる。</p>	<p>(再委託)</p> <p>第 13 条 研究機関は、本委託研究を第三者に再委託してはならない。ただし、研究機関は、機構が本委託研究の遂行上特に必要であると判断し事前に承認した場合に限り、本委託研究の一部を第三者に再委託することができる。</p>	
<p>(秘密保持)</p> <p>第14 条 研究機関及び機構は、本委託研究の実施に当たり相手方より開示を受け又は知り得た相手方の技術上及び営業上その他の一切の情報について、相手方の事前の書面による同意がなければ、これを第三者に開示・漏洩してはならない。</p> <p>2 研究機関及び機構は、本条第1 項に掲げられる情報に関する資料及び当該情報を保存した媒体等について適切に管理しなければならない。</p> <p>3 前2 項の規定にかかわらず、次条又は次の各号のいずれかに該当する場合は、本条第1 項及び第2 項の規定は適用しない。</p> <p>(1) 開示を受け又は知得した時点において、既に自己が保有していたことを証明できる情報</p> <p>(2) 開示を受け又は知得した時点において、既に公知となっていた情報</p> <p>(3) 開示を受け又は知得した後、自己の責めによらずに公知となった情報</p> <p>(4) 正当な権限を有する第三者から秘密保持義務を負うことなく取得したことを証明できる情報</p> <p>(5) 相手方から開示された情報とは無関係に独自に開発・取得したことを証明できる情報</p> <p>4 研究機関は、所属する研究者及び職員等が本条と同様の秘密保持義務を負うよう措置するものとし、当該研究者及び職員等がその所属を離れた後も5 年間本条と同様の秘密保持義務を負うよう措置するものとする。また、研究機関及び機構は研究者及び職員等以外の者について事実上自己の管理下又は監督下にある者から当該情報が第三者に漏洩しないように必要な措置を講じなければならない。</p> <p>5 実施許諾を目的として秘密情報を公開前に第三者に開示する場合には、事前に相手方当事者の書面による同意を得ることを要し、当該第三者に対しては秘密保持義務を課すものとする。</p> <p>6 本条の効力は本契約終了後も5 年間存続するものとする。</p>	<p>(秘密保持)</p> <p>第14 条 研究機関及び機構は、本委託研究の実施に当たり相手方より開示を受け又は知り得た相手方の技術上及び営業上その他の一切の情報について、相手方の事前の書面による同意がなければ、これを第三者に開示・漏洩してはならない。</p> <p>2 研究機関及び機構は、本条第1 項に掲げられる情報に関する資料及び当該情報を保存した媒体等について適切に管理しなければならない。</p> <p>3 前2 項の規定にかかわらず、次条又は次の各号のいずれかに該当する場合は、本条第1 項及び第2 項の規定は適用しない。</p> <p>(1) 開示を受け又は知得した時点において、既に自己が保有していたことを証明できる情報</p> <p>(2) 開示を受け又は知得した時点において、既に公知となっていた情報</p> <p>(3) 開示を受け又は知得した後、自己の責めによらずに公知となった情報</p> <p>(4) 正当な権限を有する第三者から秘密保持義務を負うことなく取得したことを証明できる情報</p> <p>(5) 相手方から開示された情報とは無関係に独自に開発・取得したことを証明できる情報</p> <p>(6) 公開を前提として相手方から提出を受けた文書に記載された情報</p> <p>4 研究機関は、所属する研究者及び職員等が本条と同様の秘密保持義務を負うよう措置するものとし、当該研究者及び職員等がその所属を離れた後も5 年間本条と同様の秘密保持義務を負うよう措置するものとする。また、研究機関及び機構は研究者及び職員等以外の者について事実上自己の管理下又は監督下にある者から当該情報が第三者に漏洩しないように必要な措置を講じなければならない。</p> <p>5 実施許諾を目的として秘密情報を公開前に第三者に開示する場合には、事前に相手方当事者の書面による同意を得ることを要し、当該第三者に対しては秘密保持義務を課すものとする。</p> <p>6 本条の効力は本契約終了後も5 年間存続するものとする。</p>	<p>第 1 項及び第 2 項の例外として第 15 条を参照する記載を削除する一方、第 3 項(6)を新たに設け、引き続き成果報告書等の円滑な公表を可能とするよう条文を整理。</p>

H2 2 年度戦略国際 委託新旧対照表（企業等用）

<p>(研究成果の公表)</p> <p>第15 条 研究機関及び機構は、前条に反しない限り、本委託研究の実施により得られる研究成果を原則として外部に公表することを確認する。</p> <p>2 研究実施期間中に研究者等が研究成果を外部に公表する場合、研究機関及び機構は、その公表が円滑に行われるよう合理的な範囲で協力するものとする。</p> <p>3 研究機関又は機構による研究成果の公表が、研究機関又は機構の知的財産権取得等の業務に支障をきたすおそれがある場合には、協議してその対応を決定するものとする。</p>	<p>(研究成果の公表)</p> <p>第15 条 研究機関及び機構は、前条に反しない限り、本委託研究の実施により得られる研究成果を原則として外部に公表することを確認する。</p> <p>2 研究実施期間中に研究者等が研究成果を外部に公表する場合、研究機関及び機構は、その公表が円滑に行われるよう合理的な範囲で協力するものとする。</p> <p>3 研究機関又は機構による研究成果の公表が、研究機関又は機構の知的財産権取得等の業務に支障をきたすおそれがある場合には、協議してその対応を決定するものとする。</p>	
<p>(研究成果の報告)</p> <p>第16 条 研究機関は、機構に対し、研究実施期間が終了した日又は本委託研究が中止となった日の翌日から起算して30 日以内に、研究成果報告書を提出するものとする。</p>	<p>(研究成果の報告)</p> <p>第16 条 研究機関は、機構に対し、研究実施期間が終了した日又は本委託研究が中止となった日の翌日から起算して30 日以内に、研究成果報告書を提出するものとする。</p>	
<p>(研究の中止又は期間の延長)</p> <p>第17 条 機構は、次の各号のいずれかに該当する場合、本委託研究の中止を研究機関に指示することができるものとし、研究機関はこれに従うものとする。</p> <p>(1) 研究担当者の移籍、長期療養、死去、研究運営上の重大な問題の発生その他の事由により、本委託研究を継続することが適切でないと機構が判断した場合</p> <p>(2) 第18 条に定める本契約の解除事由が発生した場合</p> <p>(3) 天災その他やむを得ない事由がある場合</p> <p>2 研究機関及び機構は、両者合意の上、研究実施期間を延長することができる。</p>	<p>(研究の中止又は期間の延長)</p> <p>第17 条 機構は、次の各号のいずれかに該当する場合、本委託研究の中止を研究機関に指示することができるものとし、研究機関はこれに従うものとする。</p> <p>(1) 研究担当者の移籍、長期療養、死去、研究運営上の重大な問題の発生その他の事由により、本委託研究を継続することが適切でないと機構が判断した場合</p> <p>(2) 第18 条に定める本契約の解除事由が発生した場合</p> <p>(3) 天災その他やむを得ない事由がある場合</p> <p>2 研究機関及び機構は、両者合意の上、研究実施期間を延長することができる。</p>	
<p>(契約の解除)</p> <p>第18 条 研究機関が次の各号のいずれかに該当する場合は、機構は本契約を解除するとともに、研究機関は本契約に基づき機構が支払った金員の全部又は一部を機構の定める期限までに返還しなければならない。</p> <p>(1) 研究機関が本契約の履行に関し、不正又は不当な行為を行ったとき。</p> <p>(2) 研究機関が本契約に違反したとき。</p> <p>(3) 研究機関における研究者等が、機構が別途定めた不適正経理に関する規定に抵触したとき。</p> <p>(4) 研究機関における研究者等が、機構が別途定めた研究活動の不正行為に関する規定に抵触したとき。</p> <p>(5) 研究機関に、「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン（実施基準）」（平成19年2月15日文科科学大臣決定）等の公的研究費に係る国の定める指針等に対して重大な違反があったとき。</p> <p>2 研究機関が次の各号のいずれかに該当した場合は、機構は何らの催告を要せずに本契約を解除し、且つ、研究機関に対し本契約に基づき機構が支払った金員の全部又は一部の返還を請求することができる。</p> <p>(1) 研究機関が破産手続開始、民事再生手続開始、会社更生手続開始、特別清算を自ら申立又は第三者から申立を受けた場合</p> <p>(2) 研究機関が銀行取引停止処分を受け又は支払停止に陥った場合</p> <p>(3) 研究機関が差押を受け、又は公租公課の滞納処分を受けた場合</p> <p>3 研究機関は、前2 項により機構が損害を被った場合は賠償の責を負うものとする。</p>	<p>(契約の解除)</p> <p>第18 条 研究機関が次の各号のいずれかに該当する場合は、機構は本契約を解除するとともに、研究機関は本契約に基づき機構が支払った金員の全部又は一部を機構の定める期限までに返還しなければならない。</p> <p>(1) 研究機関が本契約の履行に関し、不正又は不当な行為を行ったとき。</p> <p>(2) 研究機関が本契約に違反したとき。</p> <p>(3) 研究機関における研究者等が、機構が別途定めた不適正経理に関する規定に抵触したとき。</p> <p>(4) 研究機関における研究者等が、機構が別途定めた研究活動の不正行為に関する規定に抵触したとき。</p> <p>(5) 研究機関に、「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン（実施基準）」（平成19年2月15日文科科学大臣決定）等の公的研究費に係る国の定める指針等に対して重大な違反があったとき。</p> <p>2 研究機関が次の各号のいずれかに該当した場合は、機構は何らの催告を要せずに本契約を解除し、且つ、研究機関に対し本契約に基づき機構が支払った金員の全部又は一部の返還を請求することができる。</p> <p>(1) 研究機関が破産手続開始、民事再生手続開始、会社更生手続開始、特別清算を自ら申立又は第三者から申立を受けた場合</p> <p>(2) 研究機関が銀行取引停止処分を受け又は支払停止に陥った場合</p> <p>(3) 研究機関が差押を受け、又は公租公課の滞納処分を受けた場合</p> <p>3 研究機関は、前2 項により機構が損害を被った場合は賠償の責を負うものとする。</p>	<p>語句の修正</p>

H 2 2 年度戦略国際 委託新旧対照表（企業等用）

<p>(不適正な経理処理および研究活動の不正行為等に係る研究者等の申請資格の取扱い)</p> <p>第19 条 機構は、不適正経理に関する機構の規定に定める不適正な経理処理に関与し、又は不適正な経理処理に関し管理・監督上重大な責任があると認められる研究者等については、同規定における「委託研究」の規定に基づき、機構の全ての事業への申請資格を停止する。</p> <p>2 機構は、研究活動の不正行為に関する機構の規定に定める不正行為に関与し、又は当該不正行為に関し管理監督上の重大な責任があると認定された研究者等に対し、機構の全ての事業への申請資格を停止することができるものとする。</p>	<p>(不適正な経理処理および研究活動の不正行為等に係る研究者等の申請資格の取扱い)</p> <p>第19 条 機構は、不適正経理に関する機構の規定に定める不適正な経理処理に関与し、又は不適正な経理処理に関し管理・監督上重大な責任があると認められる研究者等については、同規定における「委託研究」の規定に基づき、機構の全ての事業への申請資格を停止する。</p> <p>2 機構は、研究活動の不正行為に関する機構の規定に定める不正行為に関与し、又は当該不正行為に関し管理監督上の重大な責任があると認定された研究者等に対し、機構の全ての事業への申請資格を停止することができるものとする。</p>	
<p>(調査)</p> <p>第20 条 機構は、研究機関の本契約に基づく経理管理につき確認が必要であると認められる場合、研究機関に通知の上、本委託研究の経理について調査することができる。研究機関は、かかる確認作業に関し、機構が必要とする協力を行うものとする。</p> <p>2 前項に規定する場合のほか、機構は、研究機関、研究担当者又は研究員等が本委託研究に関して不正等の行為を行った疑いがあると認められる場合には、研究機関に対し調査を要請することができ、研究機関はその調査結果を文書で機構に報告するものとする。</p> <p>3 機構が本委託研究に関して不正等の行為が行われた疑いがあると判断し、研究機関に対して請求し同意を得た場合には、研究機関は、機構が当該不正等の行為がなかったと判断するまでの間、委託研究費の使用を停止するものとする。この場合、当該不正等の行為がなかったことが明らかになったときでも、機構は、委託研究費の使用停止に基づく損害を賠償する責を負わない。</p> <p>4 機構は、第1 項に定める調査もしくは第2 項に定める報告の結果、不正等の事実が確認できたときは、本契約に定める措置のほか機構の関係する規定その他法令等に従い必要な措置を講じることができるものとする。</p>	<p>(調査)</p> <p>第20 条 機構は、研究機関の本契約に基づく経理管理につき確認が必要であると認められる場合、研究機関に通知の上、本委託研究の経理について調査することができる。研究機関は、かかる確認作業に関し、機構が必要とする協力を行うものとする。</p> <p>2 前項に規定する場合のほか、機構は、研究機関、研究担当者又は研究員等が本委託研究に関して不正等の行為を行った疑いがあると認められる場合には、研究機関に対し調査を要請することができ、研究機関はその調査結果を文書で機構に報告するものとする。</p> <p>3 機構が本委託研究に関して不正等の行為が行われた疑いがあると判断し、研究機関に対して請求し同意を得た場合には、研究機関は、機構が当該不正等の行為がなかったと判断するまでの間、委託研究費の使用を停止するものとする。この場合、当該不正等の行為がなかったことが明らかになったときでも、機構は、委託研究費の使用停止に基づく損害を賠償する責を負わない。</p> <p>4 機構は、第1 項に定める調査もしくは第2 項に定める報告の結果、不正等の事実が確認できたときは、本契約に定める措置のほか機構の関係する規定その他法令等に従い必要な措置を講じることができるものとする。</p>	
<p>(委託研究費支出状況報告書及び確定額)</p> <p>第21 条 研究機関は、研究実施期間終了（本委託研究が中止となった場合を含む）後30 日以内に、別途機構が定める様式による委託研究費支出状況報告書を機構に対し提出するものとする。</p> <p>2 機構は、前項の委託研究費支出状況報告書を調査し、機構が本委託研究に要すると合理的に判断する金額を確定する。</p> <p>3 研究機関は、既に支払を受けた概算払い金が前項の確定額を超えた場合は、その超えた金額を機構の指示に従い返還するものとする。</p>	<p>(委託研究費支出状況報告書及び確定額)</p> <p>第21 条 研究機関は、研究実施期間終了（本委託研究が中止となった場合を含む）後30 日以内に、別途機構が定める様式による委託研究費支出状況報告書を機構に対し提出するものとする。</p> <p>2 機構は、前項の委託研究費支出状況報告書を調査し、機構が本委託研究に要すると合理的に判断する金額を確定する。</p> <p>3 研究機関は、既に支払を受けた概算払い金が前項の確定額を超えた場合は、その超えた金額を機構の指示に従い返還するものとする。</p>	

H 2 2 年度戦略国際 委託新旧対照表 (企業等用)

<p>(委託研究実施に係る注意事項)</p> <p>第22 条 研究機関は、本委託研究を実施するに当たり、法令を遵守するとともに、当機構が時宜に応じて公開する戦略的国際科学技術協力推進事業(研究交流型)事務処理要領に従って、委託研究契約に係る事務処理を適正に行うこととする。</p> <p>2 前項に定めるほか、研究機関は、「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン(実施基準)」(平成19年2月15日文科科学大臣決定)等の公的研究費に係る国の定める指針等を遵守し、必要な手続き等を行わなければならない。</p> <p>3 研究機関は、本委託研究を実施するに当たり、生命倫理及び安全確保に関し必要となる諸手続を行い、且つ常に善良なる管理者の注意をもって研究を実施するものとする。</p>	<p>(委託研究実施に係る注意事項)</p> <p>第22 条 研究機関は、本委託研究を実施するに当たり、法令を遵守するとともに、機構が時宜に応じて公開する戦略的国際科学技術協力推進事業(研究交流型)事務処理要領に従って、委託研究契約に係る事務処理を適正に行うこととする。</p> <p>2 前項に定めるほか、研究機関は、「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン(実施基準)」(平成19年2月15日文科科学大臣決定)等の公的研究費に係る国の定める指針等を遵守し、必要な手続き等を行わなければならない。</p> <p>3 研究機関は、本委託研究を実施するに当たり、生命倫理及び安全確保に関し必要となる諸手続を行い、且つ常に善良なる管理者の注意をもって研究を実施するものとする。</p>	<p>語句の修正</p>
<p>(契約の有効期間)</p> <p>第23 条 本契約の有効期間は、第2 条第1 項第4 号に記載の研究実施期間及び研究実施期間終了後2 ヶ月間とする。ただし、本契約に従い本委託研究が中止された場合、中止の2 ヶ月後に終了するものとする。</p> <p>2 第5 条第2 項、第8 条から第11 条、第12 条、第15 条第1 項及び第3 項、第19 条、第20 条並びに第24 条の規定は、本契約の終了後も存続するものとする。</p>	<p>(契約の有効期間)</p> <p>第23 条 本契約の有効期間は、第2 条第1 項第4 号に記載の研究実施期間及び研究実施期間終了後2 ヶ月間とする。ただし、本契約に従い本委託研究が中止された場合、中止の2 ヶ月後に終了するものとする。</p> <p>2 第5 条第2 項、第8 条から第11 条、第12 条、第15 条第1 項及び第3 項、第19 条、第20 条並びに第24 条の規定は、本契約の終了後も存続するものとする。</p>	
<p>(管轄)</p> <p>第24 条 本契約に関連する両当事者間の紛争については、東京地方裁判所を第一審の非専属的管轄裁判所とする。</p>	<p>(管轄)</p> <p>第24 条 本契約に関連する両当事者間の紛争については、東京地方裁判所を第一審の非専属的管轄裁判所とする。</p>	
<p>(協議)</p> <p>第25 条 本契約に定めのない事項について、これを定める必要があるときは、両当事者誠実に協議の上定めるものとする。</p>	<p>(協議)</p> <p>第25 条 本契約に定めのない事項について、これを定める必要があるときは、両当事者誠実に協議の上定めるものとする。</p>	
<p>本契約の締結を証するため、本契約書2 通を作成し、研究機関及び機構それぞれ記名捺印の上、各自1 通を保管する。</p> <p>平成 年 月 日</p> <p>(研究機関)</p> <p>(機 構) 埼玉県川口市本町4 丁目1 番8 号 独立行政法人 科学技術振興機構 理事長 北澤 宏一</p>	<p>本契約の締結を証するため、本契約書2 通を作成し、研究機関及び機構それぞれ記名捺印の上、各自1 通を保管する。</p> <p>平成 年 月 日</p> <p>(研究機関)</p> <p>(機 構) 埼玉県川口市本町4 丁目1 番8 号 独立行政法人 科学技術振興機構 理事長 北澤 宏一</p>	

H 2 2 年度戦略国際 委託新旧対照表 (企業等用)

別表 委託研究費 (内訳)				別表 委託研究費 (内訳)				
事 項			金 額(千円)	事 項			金 額(千円)	
区分	費目	細目		区分	費目	細目		
直接経費	研究交流費	旅費		直接経費	研究交流費	旅費		
		シンポジウム等開催費				シンポジウム等開催費		
		小 計				小 計		
	試験研究費	設備備品費			試験研究費	設備備品費		
		消耗品費				消耗品費		
		謝金等				人件費・謝金		
		その他				その他		
小 計			小 計					
間接経費				間接経費				
合 計				合 計				
<p>※直接経費の費目間の流用額が各費目のいずれか低い金額の30%若しくは50万円を超える場合、又は設備備品費への流用増をする場合は、機構の承認を受けなければならない。</p> <p>※委託研究費は、消費税額、及び地方消費税額を含む。</p>				<p>※直接経費の費目間の流用額が直接経費の総額の50%(この額が200万円に満たない場合は200万円)を超える場合、又は設備備品費への流用増をする場合は、機構の承認を受けなければならない。</p> <p>※委託研究費は、消費税額、及び地方消費税額を含む。</p>				流用制限の緩和